愛知教育大学研究報告，42（教育科学編），pp. 1～14, February, 1993

民族社会主義の時代を回想するパウル・エストライヒ
――ドイツ教科教授史研究（Ⅶ）――

舩尾日出志
（哲学教室）

Paul Oestreich, der sich an die Zeit des Nationalsozialismus erinnert.
―― Ein Studium über die deutsche Fachunterrichtsgeschichte（Ⅶ）――

Hideshi FUNAO
(Lehrstuhl für Philosphie)

Resümee

In diesem Aufsatz handelt es sich erstens um die Übersetzung solcher Abschinitte aus Paul Oestreichs Selbstbiographie, die zeigt, wie er die faschistische Pädagogik und ihre Auswirkungen auf die Schule und die Jugend in ihrer ganzen Unmenschlichkeit durchschaute und anprangerte. In dieser 1947 veröffentlichten Selbstbiographie schrieb er jedoch auch, daß die Zeit im faschistischen Kerker die "tiefste Umwertungszeit" seines Lebens geworden sei.

Hier handelt es sich zweitens um die vergleichenden Betrachtungen der bischerigen Arbeiten, die sich auch mit Paul Oestreich in der Zeit des Nationalsozialismus beschäftigten.

In März 1933 wurde Oestreich aus der Schularbeit heraus inhaftiert. Es traf ihn dabei besonders schwer, daß ihn seine eigene Frau als Atheisten, Kommunisten und Verschwörer denunziert hatte.

Ende Mai wurde er aus der Haft entlassen. Aber der Bund Entschiedener Schulreformer und dessen Zeitschrift "Die Neue Erziehung" wurden verboten. Er erhielt auch Publikationsverbot und wurde dazu noch am 30. September 1933 vom Schuldienst definitiv entlassen. In verschiedenen nazistischen Machwerken wurde er als "Kommunisten-und Judenfreund" angeprangert. Es begann die für ihn fast unerträgliche Katakombenzeit....

1．はじめに

民族社会主義ドイツ労働者党（以下，ナチスと略記）による独裁時代においては，エストライヒは沈黙を強いられた。したがってかれ自身の文書や関係史料はきわめて僅かである。とはいえ，ベーム[1]によれば，ヴュルツブルグのエストライヒ文庫には「33年から45年までわたしの非合法活動の証明」（Der Nachweis meiner illegalen Arbeit 33-45）というタイトルをもつエストライヒの手稿と42の宣誓供述書[2]が存在しており，それらはナチス独裁体制下のエストライヒのファシズムに反対する態度および活動について興味深い情報を与えるとのことである[3]。残念ながら，筆者はそれらの貴重な史料を入手できていない。したがって，ここではナチス時代のエストライヒの思想と活動について次のような手順で叙述をすすめる。

①従来から翻訳と考察の対象としてきたケーニッヒおよびラトケの編集した論集[4]のなかの関係する2つの文書を引き続き翻訳，紹介する。それは1947年に出版されたエストライヒの自伝『ある政治的教育学者の生涯から』[5]の該当する章から抜粋されたものである。

②次節にて翻訳，紹介する第1の文書では，エストライヒがナチスにより受けた迫害体験が生々しく描写されている。次々節で翻訳，紹介する第2の文書では，エストライヒ自身のファシズム教育にたいする批判的見解が論じられている。

③次に，先行研究成果のうちケーニッヒ／ラトケ，ベーム[6]のもののナチス時代に関係する部分について論じ，比較する。特にその際，重要な観点はエストライヒが1945年にドイツ共産党に入党したことにかかわって，かれのその時代の体験をどのようにみるべきか，という問題である。

その他の論述の方式は第4稿等と同一である。

2．エストライヒのファシズム時代の体験回想
——テキスト「わが生涯の最も深刻な価値転換時代」[7]から

ヒットラーによる政権奪取の直前までエストライヒはナチスに反対する活動をおこなっていた。「1933年1月20日にわたしはブレスラウ≪ポーランド南西部オーデル川に臨むシュレジアの中心都市，1945年までドイツ領≫において，わたしの最後の，超満員の，公然の集会をもった。喝采の嵐（わたしの病気の心臓は前身を冷や汗でおおわせたが）に迎えられた！。」

民族社会主義者たちの差別性，卑劣さが，そのほんの一部とはいえ，悲しい個人的エピソードを通して明らかにされている。「9日後——ヒットラーがやってきた。タイマツ行進のなかに，非常に才能に恵まれてもいたわたしの教え子もまたいた。かれは『シュタールハルム』≪ワイマール共和国の最大にしてかつ最も影響力に富んだ軍事的抵抗同盟。自制のない民族主義的・報復主義的戦争煽動をおこなった。1933年にはヒットラーに従い，そしてＳＡに組み入れられた。≫のなかで成長し，将校になることを欲していた。3年後，かれは私のもとにやってきた。極貧でボロボロの服を着て。自分の過去の錯乱を呪いながら！。ユダヤ人の息子だったのだ！。」また，このエピソードは別の意味でも重要であると考える。筆者の従来読んできた範囲では，エストライヒは自身の授業や，自身の生徒との

関係についてほとんど語っていない。民族主義と報復主義の組織に走った教え子が，結局，エストライヒのもとに戻ったこのエピソードは，教師としてのエストライヒ像を浮き彫りにしている。

エストライヒはナチスによる政権奪取に最後まで抵抗した。次の論述から，その際ＫＰＤとＳＰＤの統一戦線が達成できなかったことに，最大の問題点を意識していたことが分かる。「当時わたしたちは，何が起こっているのかを知っていた。わたしがナチスの暗殺リストに掲載されているので，選挙日（３月５日）頃は自宅から離れているようにという警告の手紙が届いた。わたしの回答は，1932年と同じく，再びあのポスターに署名するということであった。そのポスターにおいてはマリア・ホダン≪左派民主党の知識人で，1928年に創設されたソ連邦の友連盟のメンバーであったマックス・ホダン博士【Max Hodann：1894-1946】の妻≫の要求にもとづいて，無党派の人々――ハインリッヒ・マン≪Heinrich Mann：1871-1950，文筆家，批判的リアリスト，復活しつつある軍国主義，排外主義的暴力政策およびファッショ的横暴に反対し，そしてフランスへの亡命以後は，ＫＤＰ，社会民主党，無党派知識人およびブルジョア政治家たちとともに人民戦線委員会の議長≫，ケーテ・コルヴィッツ≪Käthe Kollwitz：1867-1945，版画家，画家，彫刻家。ドイツにおけるプロレタリア芸術の代表者≫等がＫＰＤとＳＰＤに，ドイツを無謀から救うために，戦術的に統一を組むことを要求している。たとえその呼び掛けがきわめて見込みがないものだとしても，決定がおこなわれようとしている場面で，沈黙することは惨めでなかったろうか。パウル・エストライヒにとっては，いずれにせよ『容赦』はなかったのだ。」

次にエストライヒは以前には共に闘った仲間たちの離反について語る。とりわけ徹底的学校改革者同盟員の背反について怒りを隠さない。「もはや名誉ある選挙はおこなわれなかった。共和国議会の放火，すべてのＫＰＤ党員，多くのＳＰＤ党員，連盟指導者および平和主義者の拘禁，ＫＤＰの禁止，テロ，パニック！。ハルツブルク連合≪ハルツブルク戦線とも言う。ファッショ的反動派のきわめて広範囲な諸潮流〔ＮＳＤＡＰ，ＤＮＶＰ，シュタールヘルム，全ドイツ連盟[8]〕を統合し，1931年10月11／12両日のバッド・ハルツブルクにおける会議の後に創設された極端に反動的なグループであったが，1932年に崩壊した。1933年１月30日のファッショ的連合政府には以前のハルツブルク戦線の多くの指導者が結集していた。≫は「合法的」勝利を奪いさられた。離反はわたしたちのもとでもまた始まっている。地域グループ≪Ortgruppe≫と邦連盟は消え去り，凛々しいはずの男たちが――cherchez la femme！≪「婦人がこころみる」の意のフランス語。エストライヒはここではかれらの妻の影響で以前に進歩的であった男たちが政治的生活から退いているという意見を表明している。≫――退却への口実をためしそして発見し，同盟のなかの国民的[9]ろくでなしどもが，わたしにたいし『離別』のために無礼な言辞を弄し，病的な放浪者たちと『ノーマルな』卑しい者[10]たちが，わたしに地獄のような孤独への転落を嘲笑的に告げた。」

そしてエストライヒは自らの身に起こった出来事を回想する。かれはなんと職場である学校内で不当に逮捕された。また牢獄のなかで，特に共産党員との接触がかれに大きな影響を与えたことが分かる。最終的にかれを拘束状態から解放（真の解放とはとても言えないが）するのに助力したのは，かれの長年の論敵・政敵であった。もちろんそのことは大

部分エストライヒのとっていた政治的スタンス，すなわち無党派性のゆえであろう。しかし，牢獄のなかで清掃作業をエストライヒの担当分をかわりに引き受けることを申し出た共産党員のエピソードとともに，かれの人柄を彷佛させる事実であるようにも思える。「3月26日にわたしの横に幹部の残りが座りそして，同盟の文書と同盟の所有物を救う方法を助言してくれた。なんと素早い行為か！。すでに27日に，さまざまな『圧力をかける』手紙が郵便受けにあり，秘密警察がやってきて，そして事務机と書類戸棚においてむなしくうごめいていた。秘密警察はその後わたしをホーエンツォレルン学校の校長控え室で逮捕した。いかなる理由も，いかなる尋問もなしに！。わたしは非常に多くの人たちと同様に消えたのだ。犯罪者の独房に！。私の左側には本当の懲役囚人（強盗）が，右側には『赤旗：ローテ・ファーネ』の編集者が，さらに左へ4つ目の独房にはテールマン≪Ernst Thälmann〔1886-1944〕≫が，半階高いところ，向かい側にはクルト・ヒラー≪Kurt Hiller, 1885年生まれ，反軍国主義的ブルジョア民主主義者・文筆家，革命が平和への道を開拓するゆえに，平和主義と社会主義革命を互いに一致しうると見なしていた革命的平和主義者のグループのリーダーとして，エストライヒとともにドイツ平和協会とドイツ平和連合においてそれらの左派で活動した。≫がいた。わたしたちは，外にいた頃，まだほんの少し前に文書上で喧嘩していたのだが，朝のシャワーの点呼にさいして，鉄のドアの前で，頭を下げて会釈しあうことができたのであった。本当の犯罪者の戦線にばらまかれたドイツの最も積極的な人々のエリートであった。震撼させる大変革であった。独房：板張りのベッド，木製の椅子，トイレ，ブリキの鉢！――には春の気候のなかで日が当たった。紙もなく，鉛筆もなく，ナイフもなく，時計もなく，夕映えもなく！。まずはおかゆと固いパンのみ，固いパンのせいでわたしは一本の歯を折った。したがって入れ歯は8週間，グラグラであった。心臓痙攣，下痢，診察を拒否する医者，やる気のない保健補助員（それがなんと，「わたしたちは労働意欲を諸君にまず教えることになろう！。」と言うのだ。）尋問と苦痛についての訴えは無視され放置された。人道的な看守（「いまやここは精神病院だ！」[11]）と下士官的本性！。逮捕されて4日目にわたしは55才になった。わたしの勇敢な家政婦は――かの女が警視庁におけるわたしの拘留を知るまで，長い間迷っていた――，わたしに誕生日の小包（スミレの束，わたしの息子の写真およびキャンディー）が届くように，最後まで頑張った。....

文書の交換は制約された。わたしの友人たちによって雇われた弁護士はわたしのところに来なかった。一部は戦術上の，一部は怨恨を抱いて書かれたわたしの書簡は検閲されるか，あるいは横領された（わたしが「もしわたしがわたしの金髪の息子を自分で教育してはならないとなったなら，わたしはかれをユダヤ人の友人にくれてやる！。」と書いたとき）。わたしの独りぼっちの一日を――12時間の夜『夜』！――縮めたのは書物であり（最後にわたしはさまざまな書物を家から取り寄せた），洗濯と清掃仕事の遂行であり，3回の食事，部屋のなかでの散歩（3歩の距離だが），外でのナチスの行進の機械的騒音，時間ごとのグロッケンシュピール『いつまでも忠誠と誠実を！』であった。夜にはしばしば平静さを失った囚人たちがうなり，そして鉄のトビラをドンドン蹴る音が暗黒の静けさのなかに響く。そして頭脳は疑念と不遜の両極の間を，つまり転向への志向から殉教への覚悟にいたるまでの間を思い悩んだ。それはわたしの生涯の最も徹底的な価値転換の時代であった。その最初の10日間がすでに早くも過ぎ去ったとき，その実体はあらたに強化された。

共同房（12人収容）への移動により，わたしは6日間にわたり共産党員，アナーキスト，若いプロレタリアート，ユダヤ人と緊密に接触した。二段ベッド，幅の狭い廊下，机と椅子，ついたての背後には共同トイレが！。『室長』は，ＫＤＰの共和国議会議員であるシュタインフルト≪Erich Steinfurth〔1896-1933〕のことである。プロイセン邦議会のＫＤＰ議員で，ベルリンのプリンツ―アルプレヒト街にあるゲシュタポの建物のなかでファシストによって暗殺された≫は後に，ヴァンゼーへの『脱走の試み』にさいして射殺された。信じられないほど興味あふれる社会であった。隣の房には有名な人たちがいた。『外出』の場合にお互いに頷き合い，すばやく二言三言ささやきあった。ある共産党の出版業者とわたしは，確かに揺るぎない監獄での友情を結んだ。半月後わたしはかれと（そしておよそ50人のその他の者と）処罰機関であるシュパンダウに運ばれた。わたしの『保護検束』をさらに続けるために。ごく小さな自動車の檻のなかで一緒に身を縮めながら，わたしはベルリンを通過しそして隙間から『外』を見た――普通の人々が散歩している。誰がかれの人生のそのような一時を消し去りえようか。シュパンダウでは様子は違っていた。人間的で，賢明な警部殿であった。ひとつの『留置所』のなかに35人。グループが形成され，カード遊びされ，討議され，さらに歌われ，わたしは教育学のさまざまな著作を勉強した（神経痛をともないながら）。共産党幹部の机には，最後にはマックス・ホダンやクルト・アイスナー≪Kurt Eisner〔1867-1919〕は1919年に極反動の士官によって公衆の面前の街路で暗殺されたプロイセン共和国ＵＳＰＤ首相≫の息子もまた座った。わたしの手からほうきをプロレタリア――同志たちが取りあげた。『パウル，きみは年をとりすぎており，そして疲れ過ぎている。わたしたちならもっと簡単にできる！。』若干の，僅かな放浪性質はあったが，壮麗なエリート人間なのに，多くの者はなおそんなにも素朴でいることができるのである。まったく嫌なことが甘受されねばならなかった。しかしわたしはわたしの子どもに2度会うことが許された。わたしたちには，検閲的にあらかじめ読まれている新聞を通して外の政治的諸経過を，その一連の違約および野卑を体験した。その際，しばしば嘲笑的爆笑が留置所じゅうを響きわたった。わたしたちのなかには一人のてんかん[12]患者とナチスのカップルがいた。若干の者は保釈されたが，他の者は苛酷な『判断』にしたがって牢獄に送られた。4月26日ついに，転換をもたらす書簡が届いた。ちょうど上級督学士官になったばかりのわたしの古くからの敵カール・フルク≪Karl Pflug，第1次ヒットラー政府に大臣を送ったドイツ民族国民党の党員≫が，公用文書で，わたしに信用書簡を書いてくれた。そこでかれは援助を提供する，と....。」

長い牢獄生活の記述のあと，釈放後の「自由な」生活について述べる。とりわけかれが生涯をかけた学校教育の場から追放され，その上，家族に裏切られたとう事実には，言葉を失う。しかし，暫時後にはかれは再び活動を始める。ささやかな試みではあったが。「わたしが5月19日に自由に――なんという『自由』か！――なるためには，フルクの個人的保証が必要とされた。その間に『同盟』は――それは『順応』したくはなかったので――自主的に解散していた。『新教育』誌（Neue Erziehung）は，フェゲザックの教員組合によって弾劾されて，チューリンゲンですでに禁止されており，瀕死の状態であった。わたしは新たな健康回復のための休暇をとった（最初の休暇は刑務所のなかでリューマチを患うという結果で終了した。）。しかしコルベルグでは，わたしに『調査用紙』が届いた。そこではＢＥＳｃｈ≪徹底的学校改革者同盟をエストライヒはこのように略記した。≫もまた罰

すべき組織とされていた。わたしには免職の脅しがかけられ，ベルリンにおいて8月初めにわたしは教職を一時解雇され，9月30日に気送郵便によって最終的に正式に解雇された。陰鬱な夕方にわたしは，わたしが29年間活動したホーエンツォレルン学校の（間もなく自殺することになった）校長にわたしの鍵を渡した（5月20日にわたしはわたしの研究室のタンスに隠しておいてリボルバー――それを保持することは当時，刑務所行きに匹敵する行為だった！――を取り出しそしてある墓地に弾丸を抜いて埋めた）。さらに時折，一連の官憲による面倒が，そして――大沈黙，カタコンベ的存在[13]にあいなった。

わたしには続けざまにショックなことが起こった。わたしの息子の母親は Pgin≪Parteigenossin〔女性党員〕，すなわち女性ナチス党員≫になり，そしてわたしを無神論者，共産主義者，共謀者であると告発した。息子をそして――最後の財産を得るために。しかしこの時代でさえ裁判官はかの女の言い分を退けた。『売却されたものは戻ってこない！。』とはいえ，わたしには尾行がつけられそして監視された。何よりそれを隣人がおこなった。それゆえ私の家には訪問者がほとんど敢えて来ることはなかった。友人たちは臆病になり，まさに『忠誠心ある者』になった。... 確かに静かな中休みの後，小さな会話サークルが再び結成され，そしてわたしたちは当時注目に値する解明をおこなったが。」

3．エストライヒのナチズム教育観
――テキスト「1933年から1945年までのファシズム教育の非文化性」[14]から

エストライヒはまず，ナチズム教育の理論的支柱について論じる。ナチズムの屈折した民族・人種差別意識をかれは洞察していた。「クリークの『民族政治教育』≪Ernat Kriek〔1882-1947〕は教育学の領域における指導的ファッショ的イデオロークの一人であった≫は，劣等感にもとづく人種感情に由来する不正確な決まり文句的誇張および，とはいえ根気強い勤勉さと巨大な知識により誕生してはいるのだが，党の教育学のバイブルになった！。」

エストライヒは教育学雑誌の論説内容について，また当然のことながら，何より教師のひどい状況について論じる。そこからかれが，帝政時代やワイマール時代には教育学の豊かな思想が誕生したことを認め，それに比べナチス時代の教育学が貧困であると見抜いていたこともまた分かる。「教育学雑誌においては理念の撤退があり，フューラー[15]と人種についての憔悴した大仰さが登場し，しかし学校と教育の崩壊から肯定的なものを蒸留しようとする自己努力も，当然無益な試みだが，みられる。教師たちが，自由主義的―民主主義的な百年にわたる伝統を捨てて，可能なかぎり多く軍管区司令官および班指導者を配置するという唯一の野心とともにナチス時代の征服訓練に心を揺らしたことは不名誉である。教師は，若年層の教師の場合は，党職員，ＮＳＶのブロック指導者であったり，ＫｄＦの催し≪ＮＳＶ（Nationalsozialistische Volkswohlfahrt）およびＫｄＦ（Kraft der Freude）は，それらでもってナチスがその犯罪的な仮面について人民大衆を幻惑しそして人民大衆をわきへそらそうとする組織であった≫，種族研究≪種族研究はドイツ民衆への人種主義的汚染にたいするナチスの手段であった≫等々において活動するべきであるとされた。良心と魂はかれらから奪われた！。ペスタロッチの息子は下士官や行政の下っぱ[16]になった。にもかかわらず（あるいはむしろ，それゆえにか）教師身分は以前に比べてより深く，社会的な評価の軽蔑の深遠に落ち込んでしまっている。教育学的に熱中する教師は

間もなくもはや存在しなくなった。あらゆる行為は党の足跡のついた輝く政策におもねっていた。さまざまな雑誌のなかで次第に再び問題として提起されたことは，リベラルな帝政時代，および今度は正当なことだが≪「リベラルな帝政時代」という表現は誤りだが，次のワイマール共和国についての定式化は間違っていないというようにエストライヒは考えている≫，非常に悪口を言われた体制の時代≪「非常に悪口を言われた体制の時代」はファシストによって用いられたワイマール共和国にたいする定式化≫が無尽蔵の実り豊かさのなかで生み出した豊かな思想からの，無内容な，(しばしば害のない天真爛漫な)借用であった。」

ナチスの政策は優秀な若い教師志望者を消滅させた。「ヒットラーがその玉座に掲げていた失業は，それに由来する『革命的なもの』は次第に止んだ。というのはそのすべての形態における武装が全労働力を収容してしまったからである。大学入学資格試験合格者たちは，たいていそのかなりの数において，簡単に将校となり，きわめてすばやかに名声とお金を手にいれ，さもなくば軍事技術者や技師となった。講義室は空になり，若い教師は存在しなくなった。」

その結果引き起こされた学校教育の状況もまた悲惨なものであった。教師は2枚舌を使い，学習の質の低下は甚だしいものであった。ナチスの教育政策の理論的支柱ですら，驚愕するほどのものであった。「『学校補助員』が採用され，学習は暗記に変わらざるをえなかった。

教職の『上昇』野心は泥沼や浅瀬のところで止まっていた。実際，教育―道徳的な点においては空虚な教職が生じた。というのは中等学校の学士たちもまた初期の防衛以後≪当時の中等学校の教師は必ず大学を卒業した者であった。かれらも最初は多少はナチスに抵抗したことが分かる≫は畜殺[17]から守られていなかったからである。つまりＰｇ≪ナチス党員の略≫でない者はもはや採用されることはなかったのである。公式の場における仮面が生じた。そこから怒られそして強いられ，その背後で苦悩された。『冗談』のシニカリズムもまた花開いた。学校は――結局，中等学校は民衆学校よりもいっそうより以上に――党とヒットラー・ユーゲント≪ドイツの青年のためのナチスの強制組織≫への悲劇的で，恥ずかしい従属に陥ってしまった。さまざまな葛藤のなかで，学校は常にごく簡単な葛藤を採用した。落ち着きのある連続的な作業様式は決して達成されえなかった。教練，人垣≪送迎，護衛などのために編成された2列の人々≫の形成，すべてのありえるものとありえないものの収集が，存在意味であった。いかなる作文テーマも誠実に論じられなかった。清廉な討議はもはや存在しなかった。クリークはその『人間形成』≪エストライヒはここでクリークの1925年に出版された本『人間形成』を引き合いに出したのである。≫を前にして，かれの社会学的思い込みにもかかわらず愕然とせざるをえなかった。」

次に，ナチスによる学校制度の「変革」が語られる。エストライヒ自身は元来，ドイツ全土において差別のない統一学校制度を欲していた[18]が，ナチスの学校教育行政が達成したのは，外的，形式的な統一学校制度でしかなかった。「それ自体は喜ばしい教育の個々の邦の部局から全国省への移行はルスト≪Bernhard Rust〔1883-1945〕はナチスの帝国教育大臣であった。1930年には，かれは精神的錯乱の兆候を理由として教職を追放されていた。≫の無内容と無能力のゆえにあらゆる陶冶機関の集中的・全面的没落をもたらした。かれの『徹底的な諸改革』は中途半端なものと表面的なものでしかなかった。(平和と戦争の

なかでの全体的軍事化によって，あらゆるプランの開始が間断なく破壊されたということは，その「古い闘士」≪ここではルストを意味する。1933年以前にナチス党員であったファシストたちはそうよばれた。≫にとって免罪とはならない。）なるほど『中等諸学校』は『統合』された。≪さまざまな形態の中等学校は，若干のギムナジウムを例外としてオーベルシューレに統合された。≫しかしそれは豊かさ，豊富さのための統合ではなく，貧しさの『統一』であった。（本当の，実りある統一は「弾力的統一学校」[19]の枠内でしかおこなわれえない。）ギムナジウムは若干の手本のために，そして萎縮させられた形態において存続し，『オーベルシューレ』はよりいっそう民族主義的になり，そして新しい，ほとんどなじみのない外国語としてゲルマン学を設けるようになった。上級段階におけるその綱領的な分岐点≪つまり，ギムナジウムとオーベルシューレの個別化≫は無意味な冗談でしかなかった。民衆学校はいっそうしぼり尽くされた。中間段階・選別段階（ハウプトシューレ）は徹底的大混乱をもたらした。あらゆる種類の学校は，その恒常的『オーバーホール』のなかで『志操教授』の精神圧殺的優位のもとで，等しく苦悩していた。それに比べれば，古い教会強制が，自身の存在を抹殺するぞと脅した圧迫ですら，なお寛容であるように思えた。」

さらに，学校教授の方法，内容，特に教科教授の問題，その不正や質的低下について嘆かれている。私立の補習学校や家庭教師が盛んになったほどである。皮肉にもエストライヒは，戦争中に非合法ではあるが家庭教師の職につき，諸学校についての情報を生徒から得ることができたのであった。「そのむっとさせる内容は最終的に――しかしどのようにして！？――達成された超宗派的統一学校にたいする正直な喜びを生じさせなかったし，ことにその方法もまた再び古典的な暗記術に落ち込んでしまった。最も控え目な形態における労働教授についても時間と能力そして――愛！が欠落している。体育，音楽そして『芸術』は余すところなしに――例えば国民生活にではなく――民族社会主義に奉仕させられ，そして端的に言えば――それらにおいておこなわれたさまざまなことは，真の陶冶への嘲りであった。他方では繰り返し『競技』がいわゆる最高記録―成績を提示し，しかもその成績をその後，何らかの仕方でＨＪ≪ヒットラー・ユーゲント≫が得たようにしたのであった。実験教授はよりひどくなる素材と装置の不足のなかで劣悪なものになるか，あるいは消滅した。ヒットラー時代になるやいなや，私立―（補習）―教授と家庭教師の新しい盛期が始まったことは特徴的である。というのはまさに学校自体はその混乱した過度の煽動性のなかで，ほんの少数のかなりの才能ある者によってのみかろうじて独力で卒業されえたからである。残りの生徒たちは多かれ少なかれ，補習授業を受け，そしてさらにかれらがただ軍事能力のみがあれば，あるいはかてて加えてＳＳ≪ナチスの暴力組織である親衛隊≫に入る用意があれば，知識なしでも最終的にほぼいつも『卒業資格』を得た。そのような材料をもつなんと貧しい大学よ！。

しかし家庭教師は繁盛した。『政治的にあてにならない』として首になったわたしたちのみが家庭教師の仕事を許されなかった！。したがってわたしもまたようやく戦争中に『非合法』に若干の生徒のところに通った。かれらによってわたしは諸学校のほぼ全体的な欠陥を憂鬱な気持ちで研究することができた。」

ナチス時代の生産学校の実態について，関連して「勤労奉仕」について批判される。エストライヒは，それがかれが以前から主張していた生産学校[19]とは違うものであると主張

する。むしろ，論敵がエストライヒの主張を歪曲して批判したような仕方で実現したとしている。「『生産学校理念』をライ≪Robert Ley〔1890-1945〕はＮＳＤＡＰの全国組織委員長であり，そしてすべての勤労者のためのファッショ的強制組織であった「ドイツ労働戦線」の指導者であった。≫やアルンホルト≪Karl Arnhold〔1884～？〕はすでに1925年にＤＩＮＡＴ（Deutsches Institut für Nationalsozialistische Technische Arbeitsschulung）を創設していた。それはドイツの大ブルジョアジーの委託のなかで，大企業の工場附属学校におけるイデオロギー的•技術的訓練のための基礎を生み出した。≫は継父≪好ましい表現ではないが，ここでは「生産学校思想の正しい担い手ではない」ということを意味している。≫の手から受け取った。したがってその理念はもはや再認識されなかった。今や，計画されている教授施設から実際に，敵がわたしたちに意図的に誹謗したことが生じた。つまり青少年を『生産』に，企業と国家における新たな農奴制に引き渡す場が。誰ももはや自分で就職先を決めることがなくなったが，しかしあらゆる者が就職した――その者の志操にしたがって。『民族政治陶冶施設』と『オルデンブルゲン』≪民族政治陶冶施設（ＮＡＰＯＬＡ）は全寮制高等学校であった。そこにおいては人種主義的エリート観念にしたがって，さまざまな社会的領域のためのナチスの指導後継者が育成されるべきであった。オルデンブルゲンでは同じ基本原則にしたがって25ないし30才の男性たちがナチスの党後継者として訓練された。そのための準備施設として「アドルフ・ヒットラー学校」が設置された。そこには12才の少年たちが収容された。≫は陶冶思想によってではなく，出世をめざすドリルによって支配された。『勤労奉仕』≪エストライヒは，1919年以来反動的諸勢力によって宣伝されそして1931／32年以後は「自由意志の勤労奉仕」としてＳＰＤ指導者によってもまた，とりわけ労働組合によって支持された勤労奉仕の機能を見抜いていない。勤労奉仕は禁止された一般的な徴兵義務に暫定的に代わるものとして，ますます革命的になる勤労青年にたいする教育手段として，そして大ブルジョアジーやユンカーのための安価な労働力の貯水庫として考えられた。ナチス時代には「帝国勤労奉仕団」（ＲＡＤ）は６ヵ月の奉仕義務を伴うファッショ的強制組織になった。かなりの度合いで半軍事的な教育がおこなわれ，排外主義的・人種主義的煽動がおこなわれ，そしてさらに軍事施設の建設において搾取された。≫は，それは当初はまだたいてい民衆の力を生かそうという思想を取り入れていたが，間もなく徴兵期間の偽装された延長になった。

ナチス時代の学校教育の悲惨な状態は，戦争の勃発後はよりひどくなった。学校はさまざまな困難のために「のたうちまわり」，規律や自信を喪失した生徒たちは授業の終了時間を待ち焦がれていた。「年老いてそして理想主義的な立場の教師は，そのような陶冶悲惨に悲しまされていたか，あるいはいい気味だと喜んでいた。その陶冶悲惨は戦争でもって破局の高みに到達した。当初は1914年のような感激はなく，かえって（独裁者の）厳しい強制にたいする忠誠があった。しかしその後は，長年の間に，ますます権力の論理，優越信条，いかなる犠牲をも厭わない勝利に熱心に取り組むようになった。それらはますますより徹底的にドイツ民衆を，とりわけ青年と婦人を自己崇拝の袋小路へと追いやった。その袋小路からは，世界が――そしてより正しく言うならば理念と理想の世界が――大いなる頑固さのなかで単純に軽視されそして退去を命じられている状況であるので，浄化する敗北の脱出口がわずかに存在しうるだけであった。学校は科学―技術―精神のどれにおいても貧民院となった。その貧民院は最低限の知識を，フューラー時代が必要とそして甘受す

る範囲でのみ提供しつづけた。その貧民院はしかし歴史的なものにおいては，ドイツのすべての理想主義的過去に唾を吐くドグマティックな煽動図書から，そして奴隷化されているかあるいは従順な教師の口から，『民族社会主義的な』虚偽の歴史を無防備な青少年のなかに無理に流し込んでいる。『民族社会主義的な』虚偽の歴史は無防備な青少年を石器時代的世界理解の心からの従者にする。次のことを思い起こすことは，恐ろしいことである。つまり諸学校が教師の数の不足，教師のあわただしい変動，場所の不足，図書の損耗，常時に変更され，かつ破られる時間割，ますますひどくなる教授手段の不足，子どもたちの地方への移住≪とりわけ戦争の期間，田園地方に居住する大都市出身の子どもたちはキャンプ場に移送された。そのキャンプ場のなかにナチス党員教師とヒットラー・ユーゲント指導者たちはファシズムの毒素でもって青少年を汚染するための十分な前提をみいだした。≫，つまり学童疎開によって，さらに一団の年老いた白髪の教師あるいは戦争で負傷した教師たちでもって，どんなにのたうちまわっていたかを。生徒たちには，ますます規律と秩序が，習慣と自信が欠落するようになった。かれは，かれらが時代の嘘をすでに見抜いている場合でもまた，解釈することのない無意味な授業の終わりを，無駄な暗記から酔い心地にさせるような時点のように，少なくとも生活不安を和らげる体験への救済の時点のように待ち焦がれていた。」

ナチスのイデオロギー宣伝と教育の実態，それがもたらした悲惨について，さらにとりわけ成人や親の責任と問題性について論じられる。エストライヒはもちろん，誰が根本的に批判されるべきかを見失ってはいない。実に，「良心の品性がそんなにも堕落して地表を徘徊したことはかって一度もなかった」時代であった。「初期の虚偽のスローガン，『国民性への自由な道。さらに他の国民性への尊敬を！』は青少年を感激させることができた。しかし，ポーランド，ノルウェー，オランダ，ベルギー，フランス，ユーゴスラビア，ギリシャが実際の国民性担い手は否認され，ドイツの権力保持者あるいはその地の背反者の『政府』をもたらすこと，あの長期にわたった一連の激しい暴力と略奪，そのようなことは『国民性』と，どう折り合いをつけるのか。『秩序あるヨーロッパ』，『ボルシェヒズムの撲滅』，『枢軸側の優位』！≪1940年9月27日にベルリンで，ドイツ，イタリアおよび日本のファシズム3強国の間で締結されたヨーロッパとアジアにおける帝国主義的な「新秩序」の樹立のための3国協定をナチス陣営は，「枢軸側の優位」と表現した。≫というキーワードが加わった。他よりもより以上に頭がひねられ，より乱暴で，より横柄である。それらは劣等感やコンプレックスをもつドイツの腕白青少年の心にしか訴えなかった。....青少年には援助がなかったし，そして今でもそうである。かれらの『フューラー』はかれらを裏切り，両親たちはかれらを放任した。この10年間，青少年教育について語られたすべてのことは，どんなに浅はかで，どんなに自暴自棄であったことか。消耗した理想主義者リハルト・ザイフェルト≪Richard Seyferd, Prof. Dr.〔1862-1940〕はドイツ民主党党員，1919年から1920年までザクセン文部大臣，ブルジョア的学校改革者≫は1933年に，最終的に党派政策から解放されて，それ固有の陶冶諸目標に貢献できる民族社会主義国家の学校の幸福についての論文をずうずうしくも書いたものだ。自分自身を裏切りそして――民主主義と民衆を裏切った理性喪失者だ！。そして両親たちもそうだ！。かれらはかれらの子どもたちの『幸福』のみを求め，よりましな両親たちは苦痛のない成長の『若者的幸せ』を求め，『ノーマルな』両親たちは出世を求めた。それゆえある者はかれらの理想の思想世

界を厳しくかれらの子どもたちに閉鎖し，他の者はそれどころかかれらの子どもたちをＮＳＤＡＰ諸組織に完全に奉仕させた。というのはまさにその党に所属することなしには，誰も教育，教授，研究，職業選択でうまくいかなかったからである。病的なユニフォーム的階級章についての功名心は，以前には理想主義的に『革命的』であった若者を汚染した。若人たちは『老人的に』振る舞い，かれらは軍人的態度になり，かつ尊大になり，昇進させられ，古典的なスタイルの下士官的言葉を発し，かれらは髪の毛一本一本にいたるまで若さを失い，かれらはほろ酔い気分へと，密告者へと，テロリストへと教育された。そして親たちは（教師は実に....役人でしかなかった。）傍観した。静かに時折，身震いしそして嘆きながら。かれらは模範生活と情報付与によるかれらの子どもたちの指導の最も初歩的な義務を怠った。家庭と国家（学校）の間の相克地域のなかで苦しい生活をすることは，親たちの意見によれば，か弱いかれらの子どもにとって耐えられなかった。実際，その親たちは，かれらの教育課題，すなわち180度対立する生活領域への子どもたちの組み入れ，生活の悲惨さへの洞察による道徳性の形成および決断にたいする義務を解決し，まさに総じて取り組みうるには，余りにも臆病で，余りにも無能で，余りにも愚かであった。かくして諦め的消極性に退去され，そして――子どもたちは，市民として，軍人として十分であるということをまだ達成することのないまま，走ることを強いられた。それらの若者は大多数は見捨てられ，見殺しにされ，孤独に，真の親なしに成長していた！。かれらがかられの『フューラー』により『遅れた』親たちとの対立へと，親たちの『解体修理』へとそそのかされたことは，なんと驚きであることか。そのようにして数百万の家族のなかに深い亀裂，誤解，まさに敵対が生じた。ヒットラーもどきは家族を粉砕し，抹殺した。他方では部族を称賛しそして多産の母たちを，軍需工場労働者のように賞金を与えた。良心の品性がそんなにも堕落して地表を徘徊したことはかって一度もなかった。」

４．２つの先行研究のナチス時代のエストライヒ理解について

１）ラトケ／ケーニッヒの論述「プチブル的民主主義の立場をとる『平和主義活動家』から革命的労働運動の隊列における闘士へ」[20]より

ラトケ／ケーニッヒは基本的に上述したエストライヒの回想にのみもとづいて論述している。その際，特徴的なのは拘禁されている時期にエストライヒが共産党員たちと接し，それによりプロレタリア連帯を学んだということが強調されている点である。エストライヒは保釈後，しばらくしてベルリンの友人たちと小グループを結成し，そこにおいてナチス独裁のドイツ国民への，そして何より青少年への破壊的影響について，ならびにナチスの独裁体制の除去の可能性およびドイツの民主主義的な再建における課題について討議したが，その事実に関連してもラトケ／ケーニッヒは，エストライヒがＫＰＤによって主張された基本原則に本質的に合致していたとする。

ラトケ／ケーニッヒはそのような経過のなかでエストライヒがナチス体制崩壊後，1945年６月11日にＫＰＤに入党し，1946年４月のＫＰＤとＳＰＤの合同後はＳＥＤに入党したものと推理し，「それでもってエストライヒの政治的発展は，平和主義的活動家から革命的労働運動の隊列に首尾一貫した仕方でおこなわれた」[21]と結論づけている。

２）ベームの著書『パウル・エストイラヒの文化政策と教育学』[22]より

ベームはエストライヒがワイマール時代にＫＰＤにたいしてとった厳しい立場に論及す

る。それはラトケ／ケーニッヒにはまったくみられない点である。ベームはそれどころか，エストライヒが青少年への影響ということでＫＰＤとナチスを同様に断罪した次の主張を引用する。「その２つの党においては同様に，若者的不明良性，若者的理想主義，若者的冒険家衝動および若者的自己顕示欲が生かされうる。大きな弾力性と解釈可能性をもつ金切り声，煽動的な標語はあらゆる若者のヴァイタリティーにぴったりあっていた。そして両党とも，まずもって破壊しなければならず，それから――『建設する』ということを欲している！。ＫＰＤの建設網領は言語明瞭だが，しかし現実性に乏しく，ナチスのそれはまったく不明瞭で，それは『中等学校生徒たち』の生活疎遠性に相応している。」[23]

ベームもまたエストライヒがナチスによる拘束中，共産党員たちと接触があったことを当然認めている。ベームはさらに保釈後のエストライヒの活動について，ヴュルツブルクのエストライヒ―文庫の上述したような貴重な史料や同時代人の証言を得て，より詳しく述べている。「リハルト・マシュカート≪Richard Maschkat≫の証言によれば，エストライヒは『ファシズムの崩壊に至るまでドイツ全土における反ファシストたちの大きなグループのつながりを毅然と保持し，そして間断なく集会や討論を実行した。』そのような集会は政治的な時代状況の批判的分析に寄与し，そして同時にヒットラー崩壊後の反ファシズム教育の方法および学校制度の新たな建設の可能性の討議および検討へと導いた。ユダヤ人への援助[24]やベルリンのレジスタンスたちへの協力とならんで，それらの新たな建設に向けられた熟慮はヒットラー時代のエストライヒの思想の結晶ポイントを形成している。エストライヒに生涯連れ添ったブリギッテ・ショーベル≪Brigitte Schober≫の説明のなかでは，そのことについて次のように述べられている。エストライヒは『かなり親しい仲間と時代の問題状況について，そしてヒットラー的無謀を終わらせそして民主主義的・社会主義的平和ドイツの新たな建設を喚起するために着手されねばならないさまざまな処置――人物的なものに至るまで――』を検討した，と。」[25]

ベームは，にもかかわらずナチス体制崩壊後のエストライヒの学校政策要求が基本的には1919年と同じであったと述べる。つまり，学校の無償制と世俗制，私立学校の禁止，男女共学，生徒自治，両親評議会，精神労働と手工労働の同価値性，それにエストライヒが何より重視したあらゆる個人的才能の開花（全体性への）のための前提としての，そしてすべての才能ある青少年の機会均等的進級・進学のための前提としての統一学校の導入である。しかしベームによればエストライヒはワイマール時代の経験から不可欠なものとして，教員および学校監督庁からのファシズム勢力の一掃および完全に明確な反ファシズム・民主主義的精神における学校を求め，それを第一の要求としたということである[26]。その考え方は，当時，再建ないし創立された諸党派（ＫＰＤ，ＳＰＤ，キリスト教民主同盟，自由民主党）のなかでＫＰＤの政策に近かったことは確かである。ＫＰＤはすでに1945年６月11日の呼び掛けにおいて「教育制度と陶冶制度の全体からファッショ的・反動的残滓の一掃」を訴えていた[27]。

ベームはエストライヒがＫＰＤに入党し，1946年４月にはＳＰＤとの合同後のＳＥＤに入党したことにふれた後，次のように述べている。「ラトケは，エストライヒが２つの社会主義政党の合同をドイツ学校制度の民主主義的・社会主義的新構成のために待ち望んでいた，と語っていたが，ラトケは残念ながらその主張を論拠なしに提起している。」[28]ベームはエストライヒがＫＰＤに入り，そしてＳＥＤで積極的に活動したのは確かだが，その動

機について明らかにする明確な史料はないとしている。しかしその動機はエストライヒのファシズム理解に，そして民族社会主義にたいするかれの立場に求める解釈に，かなりの正当性があるのではないかという仮説を，ベームは提出している。

すなわちエストライヒはドイツの破滅を，奇妙でそして大衆心理学的に説明されうる現象としてドイツ史に突如ふりかかった宿命的な不幸であるとは考えなかった。かれはそれを常にブルジョア的―資本主義的肥大化による堕落の必然的結果であると考えた。ベームは，そのことは民族社会主義にたいするエストライヒのほとんどすべての対応から明らかであるとしている。したがってエストライヒが1945年に引き出した教育学的結論は，キリスト教と古代と古典的―理想主義的伝統のさまざまな価値を前面におくべきであるという多くの保守派の人々のそれとは違っていた。エストライヒの要求はファシズム勢力とその経済的・イデオロギー的基盤の徹底的除去に向けられていた。かくしてエストライヒはＫＰＤに近い立場をとるようになった，というのがベームの結論である。しかしベームはエストライヒの名誉のために，かれがＳＥＤに無条件に従ったのではないことを，1947年１月６日付けの党中央委員会宛の書簡から引用することによって実証している。「わたしたちの党の出版物は，そこにおいてあらゆる自由な討議にナイフが入れられることによって非常に印象の無いものとなっている。出版物は，そこにおいてあらゆる意見が検閲なしに表明できるとき，はるかにより効果的かつ魅力的となる。」[29)]

エストライヒがＫＰＤに加わったことを，エストライヒの変節とみるか，発展とみるかはともかくとして，筆者はすでに翻訳をすませている1945年以降の論説の内容からして，エストライヒが自らの根本思想を変えたとは思えない。正確な理解のためには，当時のＫＰＤの教育政策を厳密に検討し，エストライヒの教育思想と実証的に比較考察する必要があると考える。次稿以降では，その課題に取り組んでいく考えである。

（平成４年７月31日受理）

注

1）Winfried Böhm: Kulturpolitik und Pädagogik Paul Oestreichs, Verlag Julius Klinkhardt・Bad Heilbrunn/ Obb. 1973, S. 155f.

2）保釈後もかれは何度もゲシュタポに召喚された。（Vgl. H. König/ M. Radtke: P. Oestreich: ENTSCHIEDENE SCHULREFORM――Schriften eines politoschen Pädagogen. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1978, S. 19.）

3）W. Böhm: A. a. O., S. 155.

4）H. König/ M. Radtke: A. a. O..

5）Paul Oestreich: Aus dem Leben eines politoschen Pädagogen. Selbstbiographie. Berlin 1947.

6）先行研究としては，他に次のようなものがある。Christa Uhlig: Theoretische Auffassungen Paul Oestreichs zur Entschiedenen Schulreform. In: Jahrbuch für Erziehungs-und Schulgeschichte, Heft 16/1976, S. 53ff.; Ingrid Neuner: Der Bund Entschidener Schulreformer 1919-1933, Verlag Julius Klinkhardt Bad Heilbrunn 1980.

7）Paul Oestreich: Die tiefste Umwertungszeit meines Lebens, In: H. König/ M. Radtke: A. a. O., S. 119～120.

8）全ドイツ連盟は1891年から1939年まで存続したドイツ帝国主義のイデオロギーの普及に努めた組織。多くの教員，大学教授が連盟員であった。

9）「国民的」（völkich）はナチスが好んで用いた言葉である。したがって，ナチスに迎合したことを意味

する。

10）差別的な表現である。原文のニュアンスを守るため，このように翻訳した。

11）悪質な差別的な表現であるが，原文のニュアンスを守るため，このように訳した。

12)脳機能の障害等によって発作的におこる意識障害と痙攣を主症状とする疾患。現代では薬品により普通に生活をおくることができる。

13）カタコンベはローマ帝国時代に，初期キリスト教徒が迫害をのがれて隠れた地下墓場

14）Paul Oestreich:Über die faschistische pädagogische Unkultur 1933 bis 1945. In: H. König/ M. Radtke: A. a. O. S. 122～127.

15)「フューラー」は元々は指導者を意味するドイツ語だが，ここではヒットラーのこと。

16)「下っぱ」：差別的表現である。原語のニュアンスを出すためにやむをえず用いた。

17)「畜殺」：差別に通じうる用語である。他に適当な用語を設定しえなかった。

18）拙稿「20年代前半，学校反動に抗しそして陶冶制度の民主主義化を求めたパウル・エストライヒ――ドイツ教科教授史研究（II)」愛知教育大学研究報告第39輯〔教育科学〕1990年２月，９頁以降を参照のこと。

19）拙稿「『人民文化のための学校』を志向するパウル・エストライヒ――ドイツ教科教授史研究（III)」愛知教育大学教科教育センター研究報告第14号，13頁以降を参照のこと。

20）H. König/ M. Radtke: Vom “pazifistischen Aktivisten” der kleinbürgerlichen Demokratie zum Kämpfer in den Reihen der revolutionären Arbeiterbewegung. In: H. König/ M. Radtke: A. a. O., S. 8～39.

21）Ebenda, S. 21.

22）Winfried Böhm: A. a. O..

23）Zitiert nach: Ebenda, S. 153. (Paul Oestreich: Verbot ist Bankerott ! In: Neue Erziehung, 12(1930), S. 183-188.)

24）Zitiert nach: Ebenda, S. 156.

25）Zitiert nach: Ebenda. このことについてベームは別の確かな史料で確認できてはいないことを断っている。

26）Ebenda, S. 158.

27）Zitiert nach: Ebenda.

28）Ebenda, S. 159.

29）Zitiert nach: Ebenda, S. 160.